令和8年度
第1回静岡市茶どころ日本一委員会

議題（1） 第2次静岡市茶どころ日本一計画の進捗について

議題（2） 今後の茶業振興に向けた施策について

議題（3） 第3次静岡市茶どころ日本一計画の骨子案について

令和8年9月18日（金）

経済局　農政部　農業政策課　茶生産再生係

議題（1）

第2次静岡市茶どころ日本一計画の進捗について

1　静岡市茶どころ日本一計画の概要

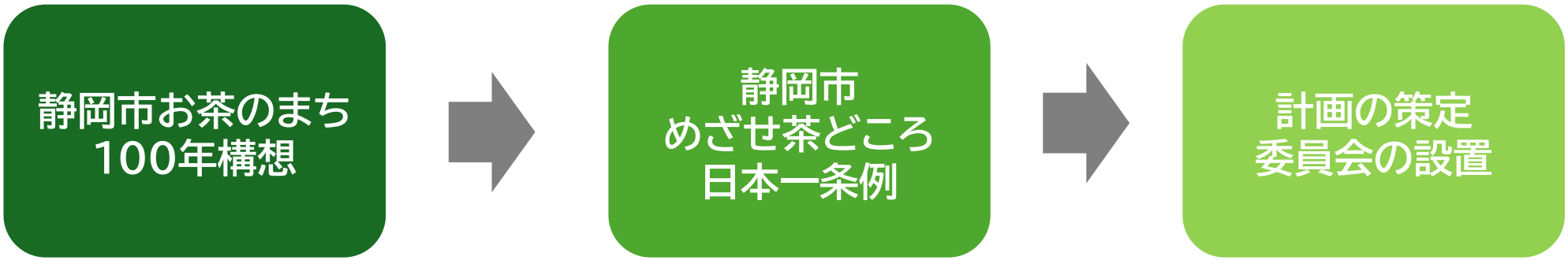
(1)茶どころ日本一計画とは

2006年5月、静岡のお茶が清水港から初めて海外へ直接輸出されてから100年の節目を迎え、「清水港お茶直輸出100周年記念イベント」が開催されました。その中で、「百年の後も風薫るお茶のまちづくりを目指します。(静岡市お茶のまちづくり宣言)」と宣言されたことをきっかけに、「静岡市お茶のまち100年構想」が策定されました。

「世界中の誰もがあこがれるお茶のまち」～お茶が育む幸せな生活がこの地に永く続くこと～

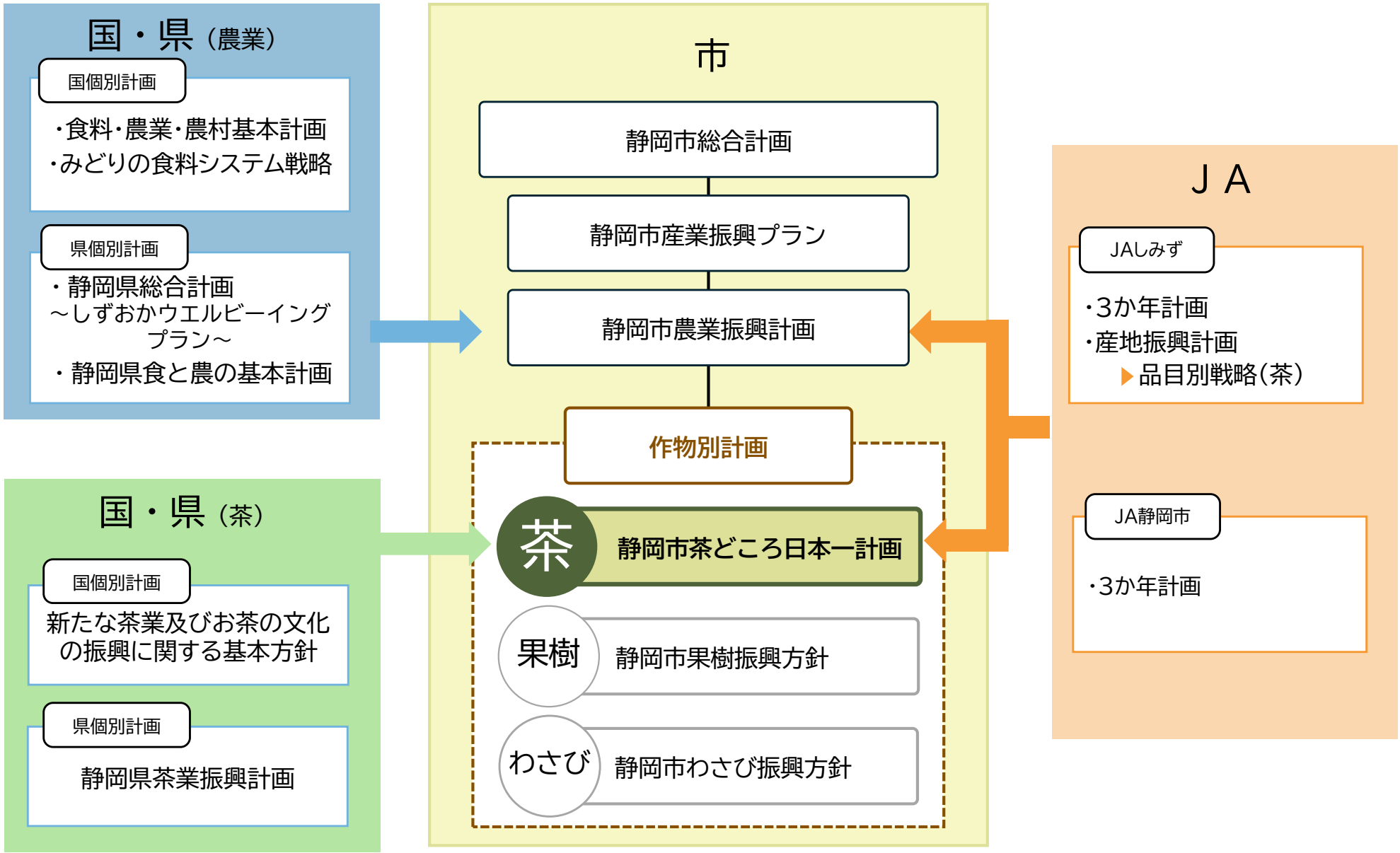
その後、2009年4月に「静岡市めざせ茶どころ日本一条例」が施行され、静岡市のお茶に関する伝統、文化、産業等を守り、日本一の茶どころとして育て、次代へ継承していくための基本理念が定められました。あわせて、同条例に基づき「静岡市茶どころ日本一計画」を策定し、「静岡市茶どころ日本一委員会」において同計画を審議することとされています。

「静岡市茶どころ日本一計画」は、同条例に基づき、静岡市のお茶に関する伝統、文化、産業等を守り、静岡市を日本一の茶どころとして育て、次代へ継承していくための施策等を定めるものです。



1　静岡市茶どころ日本一計画の概要

（2）計画の位置づけ



2　第2次静岡市茶どころ日本一計画の概要

(1)第2次計画期間

2020年(令和2年)4月1日　～　2031年(令和13年)3月31日

見直し時期:2022年度(令和4年度)第4次静岡市総合計画(前期計画)策定時　・　2026年度(令和8年度)第4次静岡市総合計画(後期計画)策定時

上位計画である「静岡市総合計画」が第5次計画に改定されたことに伴い、計画期間の途中ではあるが、上位計画との整合を図るため「第3次静岡市茶どころ日本一計画」に改定する。

(2)第2次現行計画の基本構想と主要指標

基本構想

世界中の誰もがあこがれるお茶のまち（100年後の姿）

【産業】	【生活／文化】	【都市／交流】
人々の心を引き付ける お茶をつくるまち	お茶が生活･文化の 一部となり心やすらぐまち	お茶を中心に 交流の輪が広がるまち

基本計画

目 標 像　：　茶業の成長産業化　～収益力が高く、強く攻めの茶業への転換～

目標指標　：

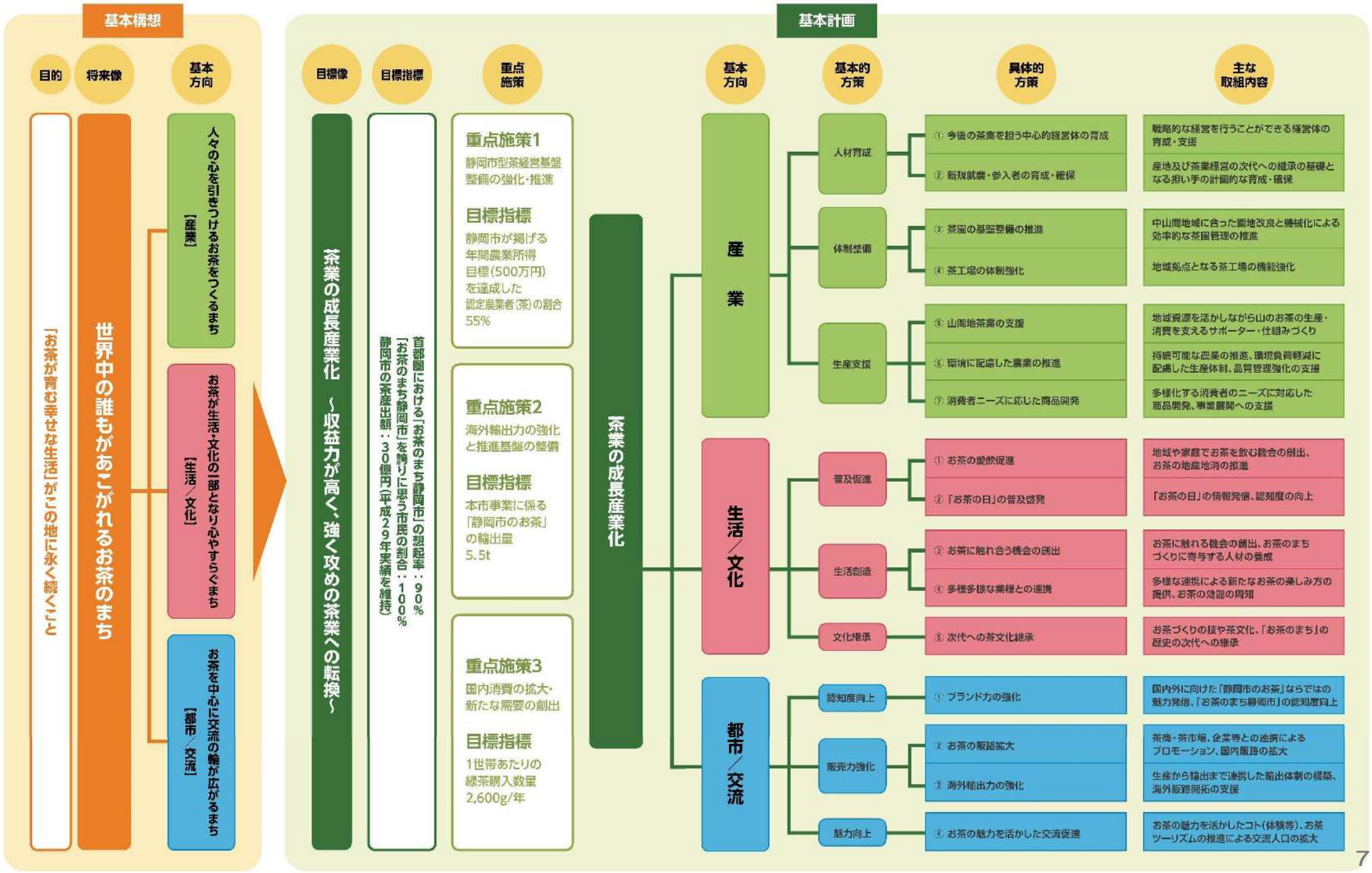
① **静岡市の茶産出額･･･30億円(2017年実績を維持)**

② **「お茶のまち静岡市」を誇りに思う市民の割合･･･100%**

③ **首都圏における「お茶のまち静岡市」の想起率･･･90%**

重点施策① 静岡市型茶経営基盤整備の 強化･推進	重点施策② 海外輸出力の強化と 推進基盤の整備	重点施策③ 国内消費の拡大･ 新たな需要の創出
静岡市が掲げる 年間農業所得目標(500万円)を 達成した認定農業者(茶)の割合 **25%(2018年度) ⇒55%(2030年度)**	本市事業に係る 「静岡市のお茶」の輸出量 **0.58t(2018年度) ⇒5.5t(2030年度)**	1世帯当たりの緑茶購入数量 **2,333g(2018年度) ⇒2,600g／年(2030年度)**

2　第2次静岡市茶どころ日本一計画　施策体系



2　第2次静岡市茶どころ日本一計画の達成状況

(1)目標指標に対する達成状況

目標指標(2030年度)	基準値(年度)	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	達成度
静岡市の茶産出額 ： 30億円	30億円(2017)	21.5億円	19.6億円	17.9億円	13.6億円	×
「お茶のまち静岡市」を誇りに思う市民の割合 ： 100%	92.0%(2018)	93.5%	86.9%	89.1%	92.9%	○
首都圏における「お茶のまち静岡市」の想起率 ： 90%	87.3%(2018)	90.7%	93.5%	－	－	○

※首都圏における「お茶のまち静岡市」の想起率(東京都民への静岡市イメージ調査)は2024年度以降調査未実施のため不明

(2)重点施策の目標指標達成状況

目標指標(2030年度)	基準値(年度)	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	達成度
【重点施策1】 静岡市が掲げる年間農業所得目標(500万円)を達成した認定農業者(茶)の割合 ： 55%	25%(2017)	32.6%	29.3%	30.7%	40.2%	△
【重点施策2】 本市事業に係る「静岡市のお茶」の輸出量 ： 5.5t ※	0.58t(2018)	7.4t	7.0t	10.8t	－	○
【重点施策3】 1世帯あたり緑茶購入数量(リーフ茶) ： 2,600g/年	2,333g/年 (2018)	1,401g /年	1,217g /年	1,415g /年	1,013g /年	×

※2022年度時点で既に当初設定した目標値を達成していることから、当該指標は本市施策の成果を一定程度適切に示したものと評価できる。
　そのため2025年度以降は「本市事業に係る輸出量」に限定した把握ではなく、市内産茶葉全体の輸出動向を捉えることが、産地としての実態や国際競争力をより的確に評価する上で重要である。このため、評価の視点を「事業起因」から「産地全体の輸出実績」へと拡張することとする。
　【参考】2025年度市内産茶葉の輸出量：92t

達成度の凡例　○ 達成(80%以上達成)　△ 一定の成果あり(60%以上80%未満達成)　× 未達成(60%未満の達成)

2 （参考）第2次静岡市茶どころ日本一計画の実施状況 ※別紙「令和7年度実施状況報告書」参照

分野別事業の実施状況（2025年度時点） ※再掲事業を含む

基本的方向・方策	対象事業数		2025年度実施状況			
			a	b	c	d
産業 1 人材育成 2 体制整備 3 生産支援	主たる事業	14	11		2	1
	関連事業	15	15			
	計	29	26		2	1
生活／文化 1 普及促進 2 生活創造 3 文化継承	主たる事業	19	17		2	
	関連事業	5	5			
	計	24	22		2	
都市／交流 1 認知度向上 2 販売力強化 3 魅力向上	主たる事業	15	13			2
	関連事業	6	6			
	計	21	19			2
総 計	主たる事業	48	41		4	3
	関連事業	26	26			
	計	74	67		4	3

実施状況総括表 a 計画の80%以上達成 b 計画の60%以上80%未満の達成 c 計画の60%未満の達成 d 未実施

議題（２）

今後の茶業振興に向けた施策について

令和8年度　主な茶業振興事業について

「第2次静岡市茶どころ日本一計画」で定めた3つの重点施策に基づき、本市が誇る「個性豊かな山のお茶」の生産から消費までを総合的に支援し、茶業の成長産業化を目指す。

茶業の成長産業化 ～収益力が高く、強く攻めの茶業への転換～

生産 → 流通 → 消費

重点施策1　静岡市型茶経営基盤整備の強化・推進

KPI：年間農業所得目標500万円を達成した認定農業者（茶）の割合　25%（H30）⇒55%（R12）

品質・生産性向上

茶産地総合対策事業等　持続性の高い茶生産体制の整備、茶の品質や生産性の向上を図るため、茶園の整備、製茶機械等の導入支援、改植支援等を実施する。

① 茶園改良整備事業：茶園等の生産基盤整備（園地改良・作業道整備・防霜施設新設等）に係る補助
② 輸出拡大生産体制強化支援事業（新改植支援）：有機茶・碾茶生産に適した品種への新改植等に係る補助
③ 茶園改良整備事業（新改植事業）：有機茶・碾茶生産に適した品種への改植に係る補助
④ 加工施設機械整備事業：品質向上・生産性向上に資する荒茶/仕上茶加工機の導入・更新に係る補助
⑤ 茶園管理資機材導入事業：茶園管理に必要な資機材（乗用茶園管理機、被覆資材等）の導入に係る補助
⑥ 補完作物転換事業：茶園の一部を他の作物へ転換する経費の補助

経営力強化

碾茶炉導入支援事業　碾茶製造ライン及び被覆資材等の導入に係る補助

有機茶生産支援事業　・モデル圃場における土壌分析や経営収支調査等の実証を通じ、静岡市型有機茶経営モデルを構築する。
・有機JAS認証の取得に係る経費の補助や、新たに有機JAS認証を取得した圃場へ奨励金を交付する。

スマート生産方式SOP（スマート農業技術導入・運用手順書）作成研究事業　運搬ロボットの導入による作業負担軽減の実証を市内モデル経営体で行う。

茶共済加入推進事業　茶生産者の経営安定とリスク軽減を図るため、茶共済制度への加入を促進する。

重点施策2　海外輸出力の強化と推進基盤の整備

KPI：本市事業に係る「静岡市のお茶」輸出量　0.58t（H30）⇒5.5t（R12）

海外販路開拓

輸出拡大支援事業　フランス・オーストラリア・アメリカ（5市2町連携）において、茶業者に代わり営業代行等を行うプラットフォームを構築・運営し、商談の開催、契約、納品に至るまで継続的に支援する。

輸出簡便化システム構築事業　輸出に必要な通関手続等をシステム内で簡潔に実施できるようにすることで、多くの茶業者が輸出に取り組みやすい体制を整える。

ブランド力強化

「静岡市のお茶」ブランド力向上事業　「静岡市のお茶」のブランド力向上にむけたマーケティング戦略を構築及び実践に取り組む。

静岡市の抹茶分析・価値創出事業　科学的分析により、静岡市産の碾茶/抹茶の独自性・優位性を客観的に示し、価格競争に依らないブランドの確立を目指す。

重点施策3　国内消費の拡大と新たな需要の創出

KPI：1世帯あたりの緑茶購入数量　2,333g/年（H30）⇒2,600g/年（R12）

普及促進 茶文化継承

茶文化振興事業　お茶に触れる体験や文化を学ぶ機会を創出し、お茶を身近に感じられる風土を醸成するとともに、茶文化を継承する人材を育成する。

【主な取組】
① お茶の美味しい入れ方教室（市内小学校5・6年生対象）の開催
② 小学生への静岡市茶普及促進事業（市内小学校4・5・6年生対象）の実施（静岡市茶業振興協議会）
③ 駿府本山お茶まつり事業
④ 「お茶博士in静岡市」の開催

情報発信 消費拡大

有機茶販路開拓支援事業　有機茶地域おこし協力隊と連携した販路開拓や商談会の開催・展示会への出展等を行う。

「お茶のまち静岡市」HP活用事業　ホームページやFacebookで「静岡市のお茶」「お茶のまち静岡市」の情報を発信し、認知度向上とブランド力強化を図る。

交流促進

お茶ツーリズムを活用した誘客促進事業　お茶ツーリズム体験プログラムを実施する事業者に対し、受入環境の整備やプログラム造成を支援等を行う。【観光国際課】

台湾市場からの誘客事業　台湾の旅行関係者を対象としたお茶ツーリズムセミナーや、現地レストラン等でのプロモーションイベントを実施する。【観光国際課】

議題（３）

第3次静岡市茶どころ日本一計画の骨子案について

1　静岡市茶業の現状　※別紙「静岡市茶業の現状」参照

▼ **生産基盤（経営体数・茶園面積・産出額）が長期的に大幅減少。**
（1995年→2025年 ： 茶農家数　91%減、茶園面積　81%減、産出額　88%減）

▼ 静岡市の衰退は**県平均より深刻**。1経営体当たりの平均農業収入も県を下回る。
⇒ **“儲からない産地”の状態が継続している**

▼ 1ha当たり収入が低下し、生産性効率化・集約化の遅れが顕在化。

⇒ **収益性の向上が喫緊の課題**

▼ 碾茶（抹茶用原料）比率が低く、**市場の需要への対応が遅れている**。

▼ 国内消費（世帯あたり購入量）は大幅減少。

● 静岡市は中山間地域の特色を活かした**高品質な「山のお茶」**の産地である。

● 茶価も上昇傾向にあり、単価改善による収益性向上が期待できる。

● **日本茶の輸出が好調に推移。**抹茶を中心に海外需要が拡大している。

● **インバウンドを中心に「コト消費」が拡大**。お茶ツーリズムへの関心が高まっている。

2　第3次静岡市茶どころ日本一計画概要

(1)改定の方向性・考え方

上位計画で新たに示された方向性と整合を図り、第5次静岡市総合計画及び第3次静岡市農業振興計画が目指す姿の実現に寄与する計画とする。

⇒**単なる改定(後期計画の策定)ではなく、新たに「第3次静岡市茶どころ日本一計画」を策定する。**

第5次静岡市総合計画の政策目標

(農業)安全・安心な農産物が持続的に生産・流通・販売される仕組みを構築し、農業の稼ぐ力が高いまちにします。

施策①　儲かる農業を実践するモデルケースを確立し、新規就農者を安定的に確保・育成します。
施策②　農地の集約化やスマート農業技術の活用などにより、農業の生産性を向上します。
施策③　低・未利用資源を活用した循環型の有機農業経営モデルを構築・普及するとともに、安心・安全な農産物の流通・販売が最適に行われる仕組みを構築します。
施策④　マーケットニーズをとらえたお茶の販路開拓や商品開発等を促進するとともに、国内外に静岡市産のお茶を高付加価値で販売していく仕組みを構築します。

第3次静岡市農業振興計画の将来像(案)

稼ぐことができる農業の実現　～次世代につながる経済性・持続可能性・魅力を備えた農業～

静岡市茶どころ日本一計画の目標像

第2次：茶業の成長産業化　～収益力が高く、強く攻めの茶業への転換～

第3次(案)：稼ぐことができる茶業の実現　～収益力が高い茶業への転換～

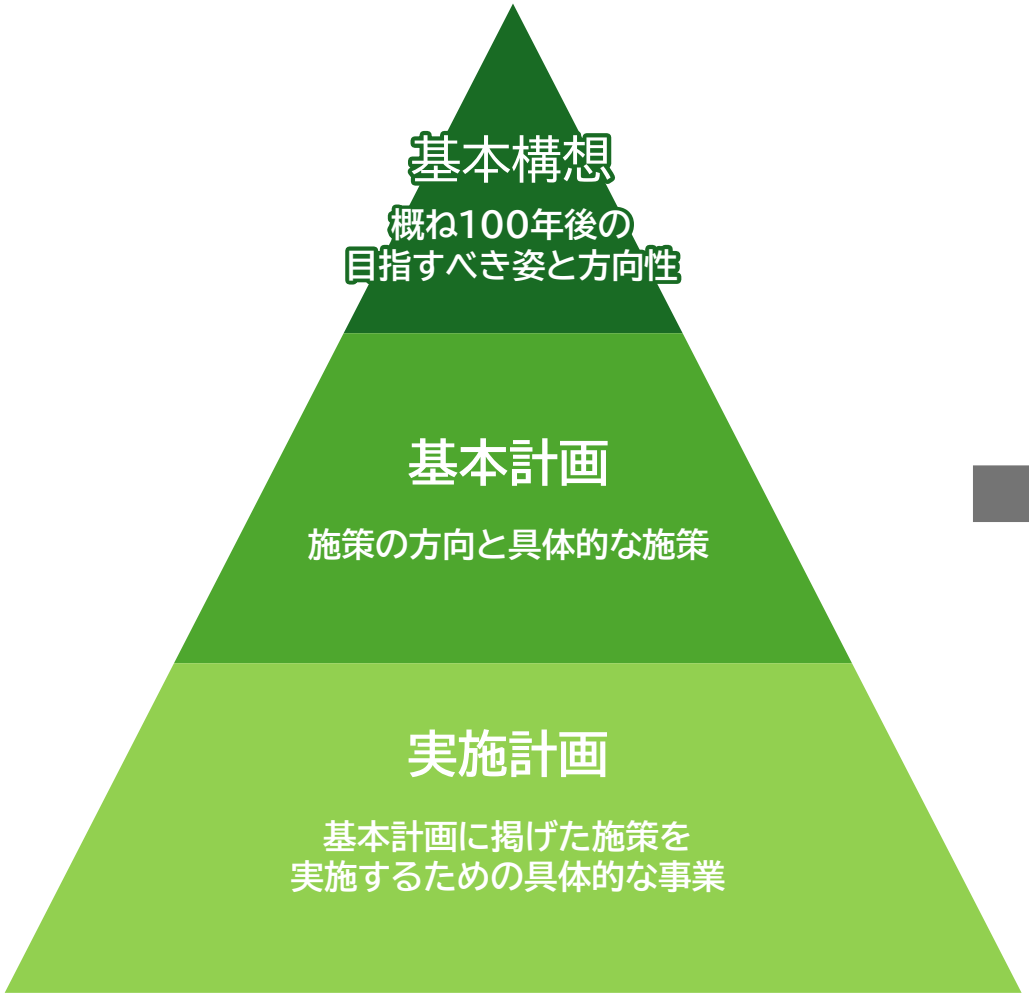
2　第3次静岡市茶どころ日本一計画概要

(2)計画期間及びフレームについて

第5次静岡市総合計画と整合を図り、計画期間を2027年度～2035年度の9年間とする。

また、第2次静岡市茶どころ日本一計画では概ね100年後の目指すべき姿と方向性を定める「基本構想」を設定していた。しかし、静岡市茶どころ日本一計画は上位計画である静岡市総合計画及び農業振興計画に即して進めるものであることから、第3次静岡市茶どころ日本一計画では基本構想を設定しない。

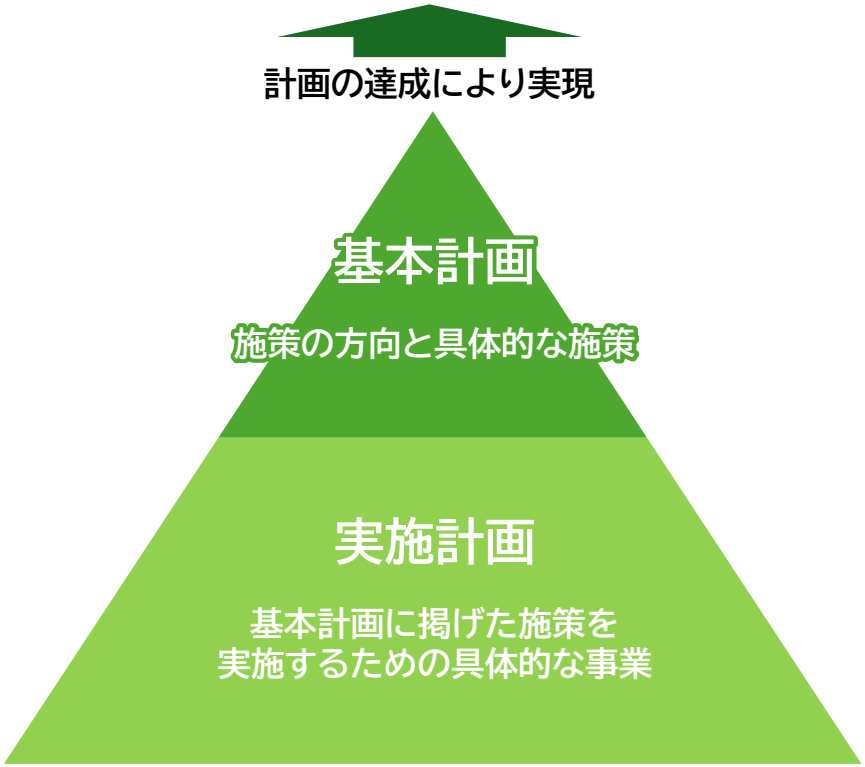
●現計画



●改定案

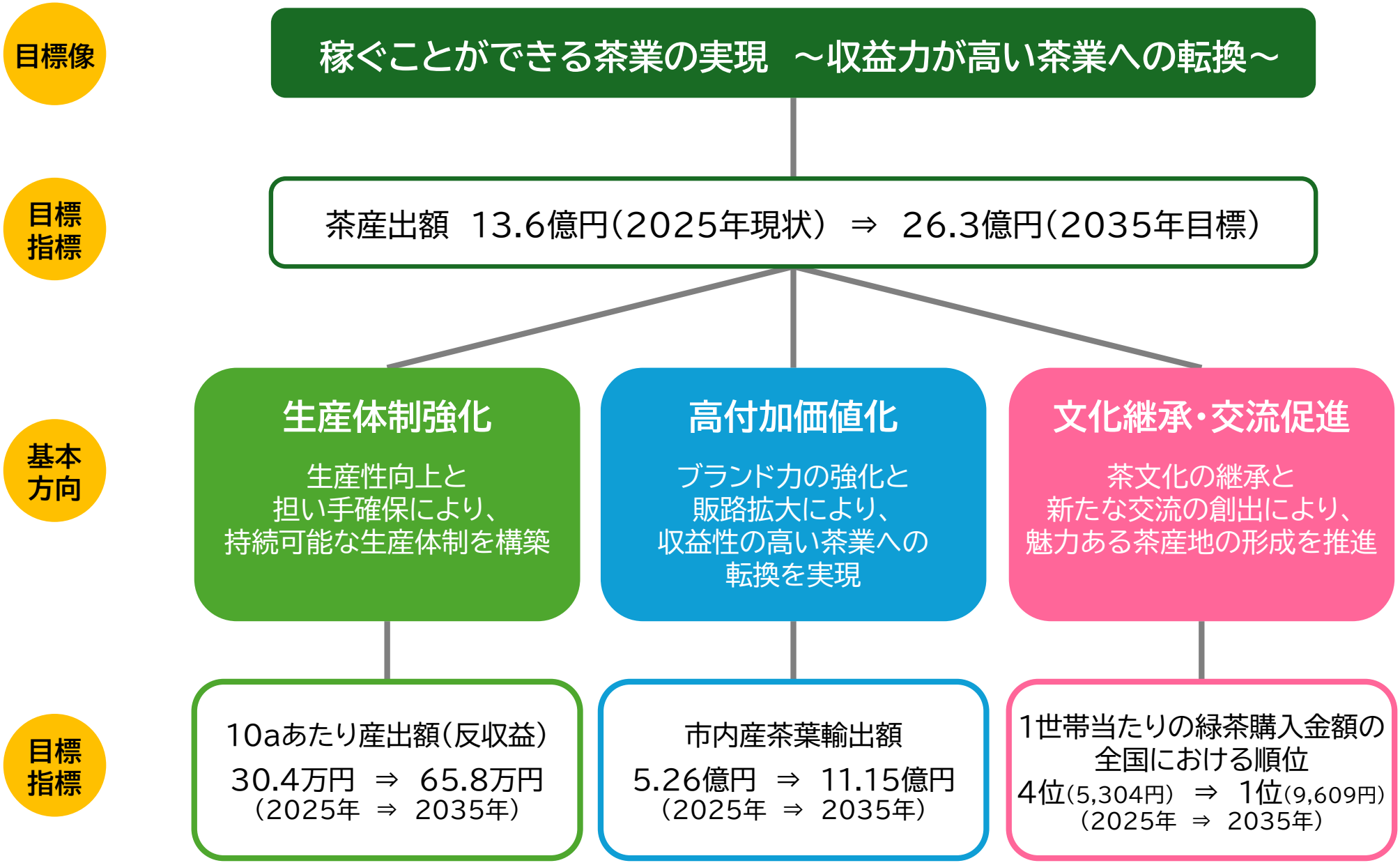
目指す「お茶のまち静岡市」の姿

静岡の茶業を次代につなぎ、持続可能な産地を実現するため、茶業を「稼げる産業」へと発展させ、担い手の確保・育成を進めていくとともに、暮らしや文化、交流の面からも「お茶のまち」としての魅力を高めていく。こうした取組を着実に進め、計画に掲げる目標を達成することで、**「世界中のだれもがあこがれるお茶のまち」**を実現する。



2　第3次静岡市茶どころ日本一計画概要

(3)施策体系について



3　第2次との比較

	第2次(2020年～2030年)	第3次(2027年～2035年)
目標像	茶業の成長産業化 ～収益力が高く、強く攻めの茶業への転換～	稼ぐことができる茶業の実現 ～収益力が高い茶業への転換～
目標指標	・首都圏における「お茶のまち静岡市」の想起率：90% ・「お茶のまち静岡市」を誇りに思う市民の割合：100% ・静岡市の茶産出額：30億円	茶産出額：26.3億円
基本方向	産業　・　生活/文化　・　都市/交流	生産体制強化　・　高付加価値化　・　文化継承・交流促進
基本方向 の 目標指標	①静岡市型茶経営基盤整備の強化・推進 年間所得500万円を達成した認定農業者(茶)の割合　55% ②海外輸出力の強化と推進基盤の整備 本市事業に係る「静岡市のお茶」の輸出量　5.5t ③国内消費の拡大・新たな需要の創出 1世帯当たりの緑茶購入数量　2,600g/年	①10aあたり産出額(反収益)　65.8万円（生産体制強化） ②市内産茶輸出額　11.15億円（高付加価値化） ③1世帯当たりの緑茶購入金額の全国における順位 1位(9,609円)（文化継承・交流促進） ※目標指標の達成に向け、基本方向ごとに設定する

4　第3次静岡市茶どころ日本一計画　各基本方向の概要

Ⅰ　生産体制強化　生産性向上と担い手確保により、持続可能な生産体制を構築

施策の概要

本市の茶園は、良質な茶の生産に適した環境を有する一方、傾斜地が多く、平坦地と比べて効率的な管理が可能な園地が少ないことから、規模拡大が容易ではない。
また、茶園面積・茶農家数・茶産出額はいずれも大きく減少しており、高齢化等による担い手不足や、離農に伴う荒廃農地の増加も課題となっている。

こうした課題に対応するため、茶園の基盤整備や集積・集約化等を進め、生産性の向上と担い手の確保・経営規模の拡大を図ることで、持続可能な茶産業の実現を目指す。

基本的方策①
生産基盤の強化

具体的方策

・茶園の基盤整備、集積・集約化

・荒廃茶園の再生・再編、耕作適地の維持・保全

基本的方策②
担い手確保・人材育成

具体的方策

・中心的経営体の育成と経営基盤の強化

・多様な人材の確保と円滑な事業継承の推進

・新規就農者の確保・育成と定着支援

基本的方策③
生産力・収益性の向上

具体的方策

・需要の高い抹茶（碾茶）や有機茶等への生産転換

・優良品種の導入による生産性向上と経済性の確保

・茶商等との連携による需要把握と生産への反映

目標指標　：　10aあたり産出額（反収益）　30.4万円　⇒　65.8万円
（　2025年　⇒　2035年　）

4　第3次静岡市茶どころ日本一計画　各基本方向の概要

Ⅱ　高付加価値化　ブランド力の強化と販路拡大により、収益性の高い茶業への転換を実現

施策の概要

「静岡市のお茶」は、主に山間地の急峻な斜面を利用して生産される高品質な「山のお茶」であり、“お茶の匠”の熟練の技術等により、多様な味わいの茶が生み出されている。産地ごとの地理的特性や背景、産地の多様性を付加価値としてブランド化の強化を図る。

また、国内需要が減少する一方、世界的な健康志向の高まりや抹茶ブームを追い風に、海外におけるお茶への関心は年々高まっている。

国は農林水産業の「海外から稼ぐ力」を強化を掲げ、2030年目標として「農林水産物・食品の輸出額5兆円」を打ち出しており、茶も輸出重点品目に選定されている。

こうした動きを捉え、市内の茶業関係者と連携して海外販路を開拓するとともに、輸出に対応できる高品質な茶の生産体制を整備する。

基本的方策①
ブランド力の強化

具体的方策

・「静岡市のお茶」のブランド戦略の構築・推進

・地域特性を活かした差別化と独自性の強化

・ブランド価値向上に向けた戦略的プロモーションの推進

基本的方策②
国内外の販路拡大

具体的方策

・国内外における販路拡大と多様な販売チャンネルの活用

・茶商や企業等との連携による流通・販売体制の強化

・生活様式の変化や需要の多様化に対応した商品展開

基本的方策③
海外輸出力強化

具体的方策

・茶業者の海外市場の開拓と販路拡大支援

・輸出取引の円滑化に向けた環境整備

目標指標　：　市内産茶葉輸出額　5.26億円　⇒　11.15億円
（　2025年　⇒　2035年　）

4　第3次静岡市茶どころ日本一計画　各基本方向の概要

Ⅲ　文化継承・交流促進　茶文化の継承と新たな交流の創出により、魅力ある茶産地の形成を推進

施策の概要

本市は、お茶の年間購入数量・年間支出金額がいずれも全国平均を上回るなど、市民の暮らしにお茶が根付いている。こうした茶文化を次代へ継承するため、学校や地域における茶育を推進するとともに、地元の茶・茶畑・生産者と市民や来静者との接点を増やし、多彩な「お茶×α」を創出する。

また、静岡茶発祥の地としての歴史や文化、茶畑が織りなす景観、お茶の匠や茶商の熟練の技術等を観光資源として活用し、本場ならではのコトづくり（体験）やお茶ツーリズムを推進する。インバウンドを含む国内外からの来訪を促進し、交流人口の拡大と関係人口の創出につなげる。

基本的方策①
消費拡大・生活への定着

具体的方策

・多様な消費者層に向けたお茶の魅力発信
・愛飲促進と日常生活への定着に向けた取組の推進
・学校や地域における茶育の推進

基本的方策②
茶文化の継承

具体的方策

・茶文化や製茶技術の次代への継承

・歴史的資源を生かした価値の継承・発信

基本的方策③
魅力向上・交流促進

具体的方策

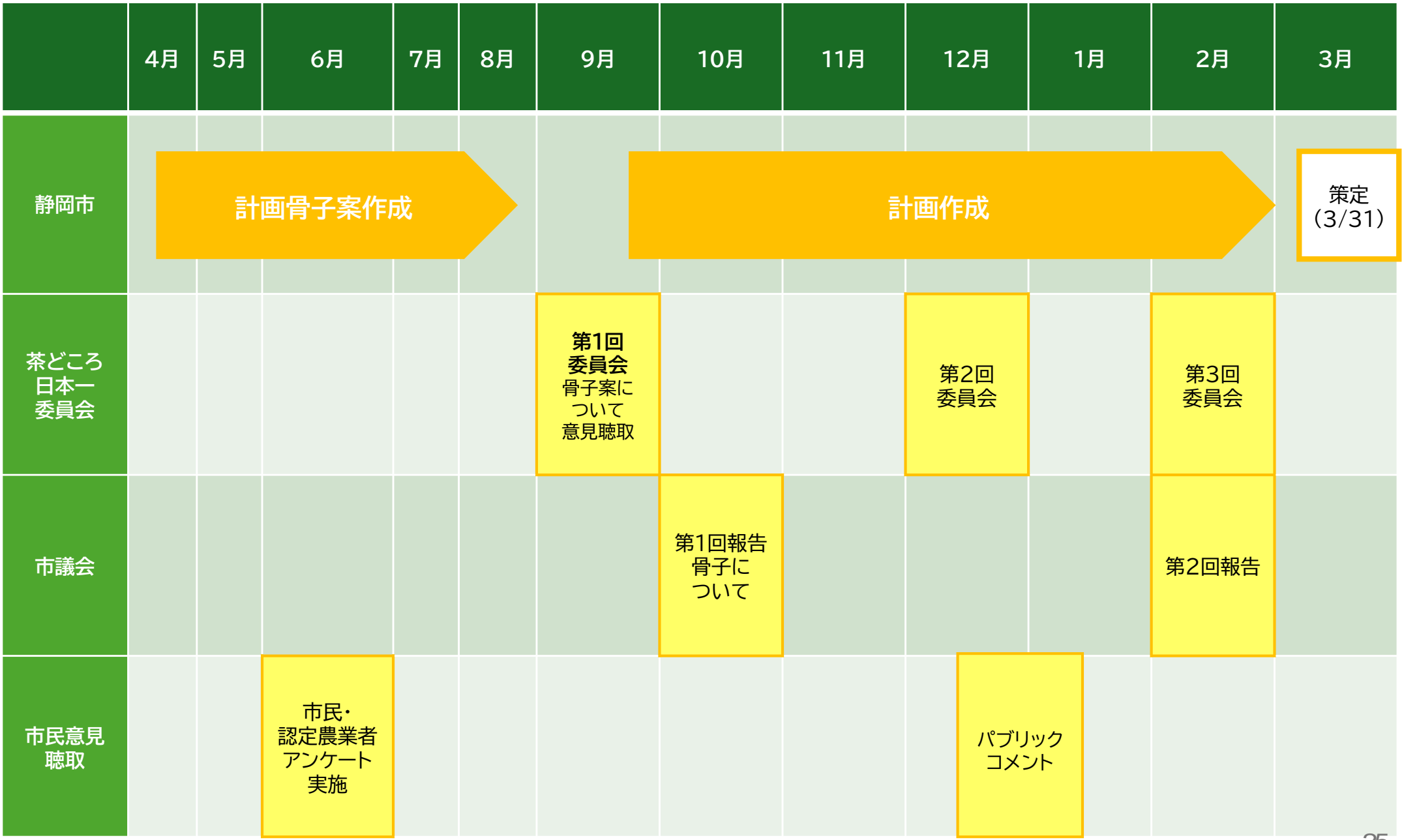
・ティーツーリズムの推進による交流機会の創出

・体験型コンテンツの充実による地域の魅力向上

・国内外からの来訪促進と関係人口の創出

目標指標　：　1世帯当たりの緑茶購入金額の全国における順位　4位(5,304円)　⇒　1位(9,609円)
（　2025年　⇒　2035年　）

5　第3次静岡市茶どころ日本一計画策定スケジュールについて



参考

令和8年度　第1回静岡市茶どころ日本一委員会

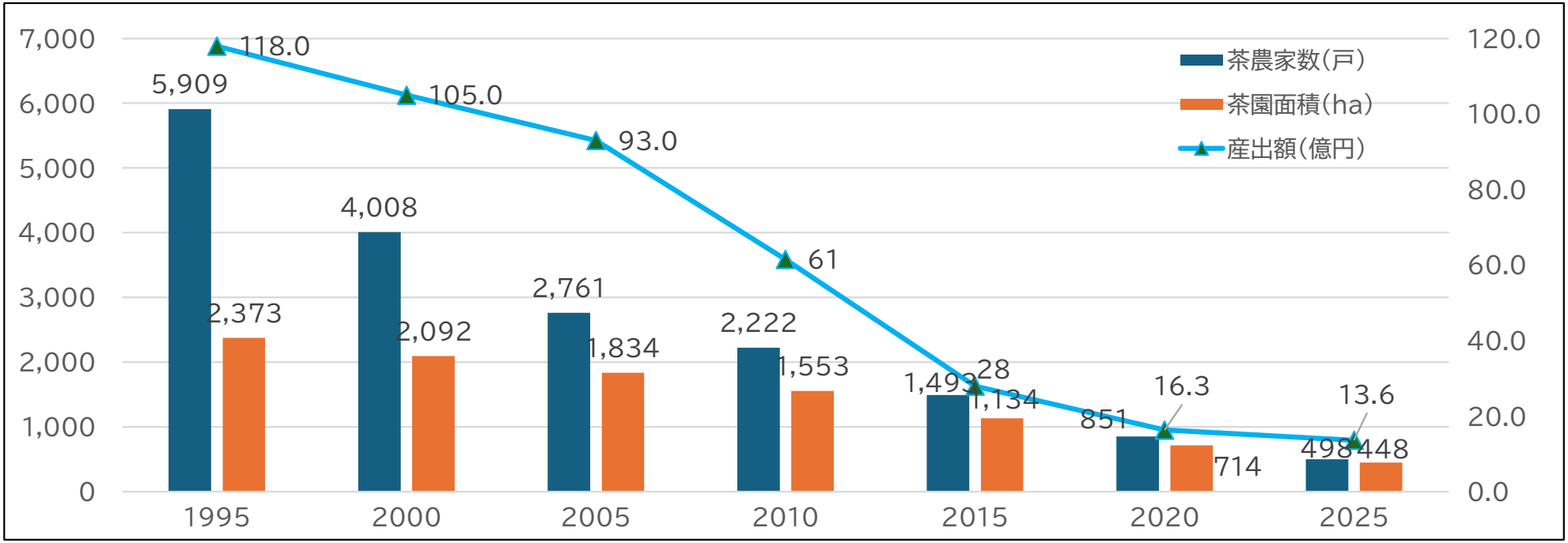
静岡市の茶業の現状について
（資料編）

令和8年9月18日（金）

経済局　農政部　農業政策課　茶生産再生係

3　静岡市茶業の現状（生産①）

茶園面積・茶農家数・産出額推移



年	1995	2000	2005	2010	2015	2020	2025
一戸あたり茶園面積（a） （茶園面積/茶農家数）	40	52	66	70	76	84	90
一戸あたり農業収入（万円） （産出額/茶農家数）	200	262	337	275	188	192	273
1haあたり農業収入（万円） （産出額/茶園面積）	497	502	507	393	247	228	303

出典：農林業センサス、市町村別農業産出額（推計）※2010年の産出額は未調査のため推計

●1995年から2025年までの30年間で、茶農家数・茶園面積・産出額のいずれも大幅に減少している。
（茶農家数：約91%減少、茶園面積：約81%減少、産出額：約88%減少）
●1戸あたりの茶園面積は拡大しているものの、農家数の大幅な減少に伴うものであり、経営規模の拡大が十分に進んでいるとは言えない。
●1戸あたりの農業収入は2025年時点で300万円に満たず、経営の継続が困難な状況にある。
●1haあたりの農業収入も横ばいから減少傾向で推移しており、十分な収益性を確保できていない。

3　静岡市茶業の現状（生産②）

静岡市・静岡県における茶の生産データの推移と比較

	静岡市／静岡県		2005年	2025年	対比 （2005年を1とした場合）
茶経営体数	静岡市		2,761戸	498戸	0.18
	県		18,064戸	3,430戸	0.19
茶園面積	静岡市	面積	1,834ha	448ha	0.24
		1戸あたり面積	0.66ha	0.9ha	1.36
	県	面積	15,183ha	7,014ha	0.46
		1戸あたり面積	0.84ha	2.04ha	2.43
産出額	静岡市		93億円	13.6億円	0.15
	県		652億円	213億円	0.33
1経営体あたりの平均農業収入	静岡市		335万円	273万円	0.82
	県		361万円	621万円	1.72
荒茶生産量	静岡市		4,690t	1,126t※	0.24
	県		44,100t	24,100t	0.55
反収（産出額/10a）	静岡市		51万円	31万円	0.61
	県		43万円	30万円	0.70

※2025年の市の荒茶生産量については推計値　出典：農林業センサス、市町村別農業産出額（農水省）、茶関係資料（日本茶業中央会）

●2005年と2025年の対比において、**茶園面積は**県は46%に減少に対し、**静岡市は24%まで減少している。**
●茶の経営体数は、市・県ともに同程度減少しているが、**荒茶生産量**では県は55%に減少に対し、**静岡市は24%まで減少している。**
●**1戸あたりの面積**は、市・県ともに集約化等により拡大しているが、県が約2.4倍（2.04ha/戸）に対し、**静岡市は約1.3倍で、かつ、1戸あたりの面積も小さい（0.9ha/戸）。**
●この結果、1経営体あたりの**平均農業収入**は、県の172%に対し、**静岡市は82%に減少している。**
　⇒**静岡市は、1戸あたりの面積が広がらず、所得が向上しないため、茶業の持続が難しくなっている。これは生産性拡大に有効な、大規模化・集約や平坦化を進めてこなかったため。**

3　静岡市茶業の現状（生産③）

主要茶生産府県における茶種別生産量

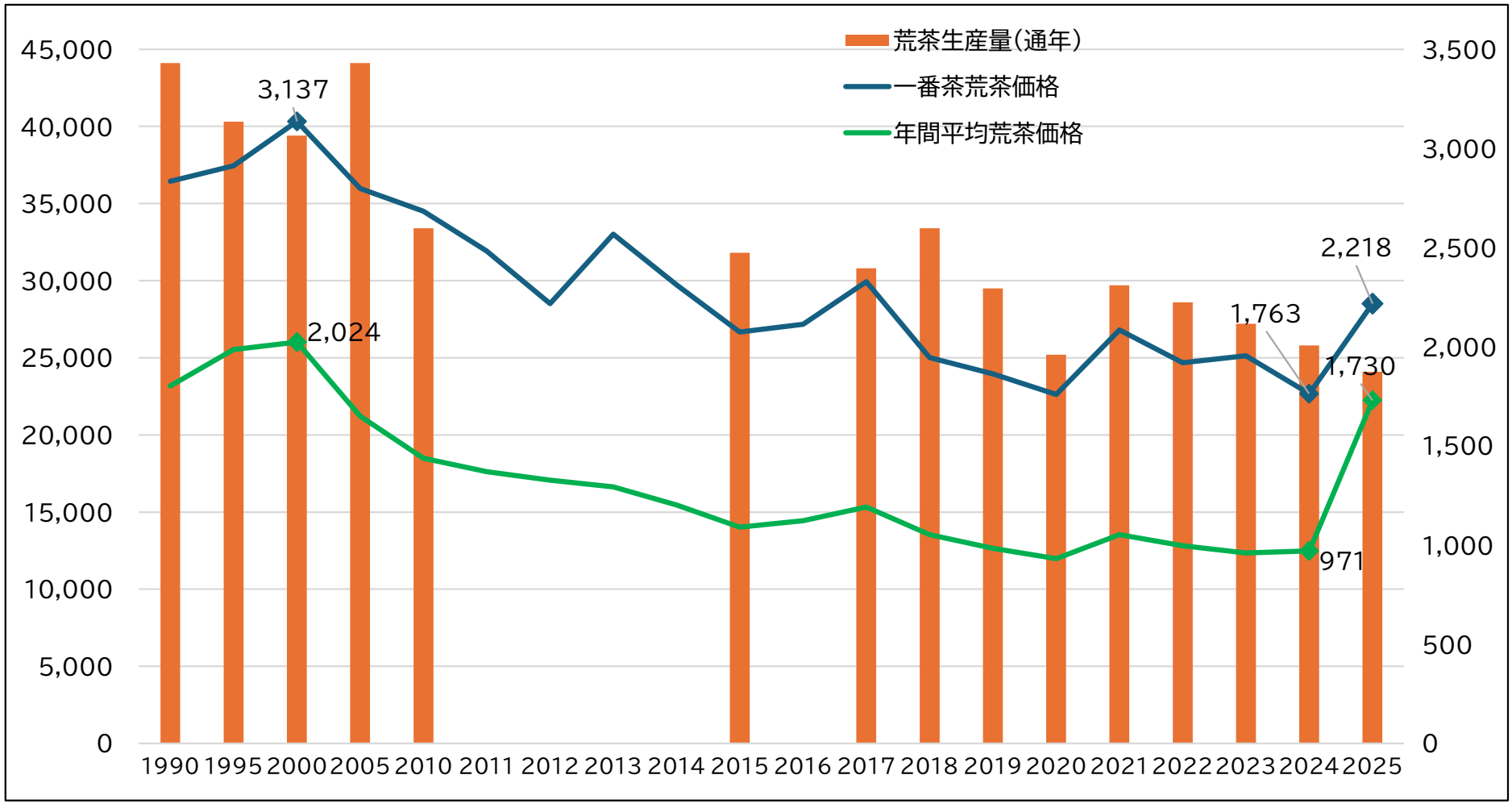
2024　茶種別生産実績（t）		京都	三重	静岡	鹿児島	全国
碾茶	生産量	1,068t	332t	611t	2,150t	5,336t
	全国におけるシェア	20.0%	6.2%	11.5%	40.3%	100.0%
煎茶	生産量	250t	706t	15,209t	14,700t	36,511t
	全国におけるシェア	0.7%	1.9%	41.7%	40.3%	100.0%
番茶	生産量	914t	1,039t	9,622t	8,410t	21,495t
	全国におけるシェア	4.3%	4.8%	44.8%	39.1%	100.0%
かぶせ茶	生産量	102t	1,138t	182t	5t	1,928t
	全国におけるシェア	5.3%	59.0%	9.4%	0.3%	100.0%
その他 ※玉露、紅茶、食品加工用等	生産量	1,786t	1,805t	176t	1,735t	8,184t
	全国におけるシェア	21.8%	22.1%	2.2%	21.2%	100.0%
合計	生産量	4,120t	5,020t	25,800t	27,000t	73,454t
	全国におけるシェア	5.6%	6.8%	35.1%	36.8%	100.0%

出典：全国茶生産団体連合会調査

●静岡と鹿児島で全国生産量の約70%を生産。
●静岡と鹿児島の煎茶（合計：29,909t）で、全国の煎茶生産量の約80%を占めるが、煎茶生産量は減少している。
●鹿児島の生産量全体に占める碾茶の割合は8%（2,150t/27,000t）。一方、静岡は3%（611t/25,800t）に満たない。
　⇒静岡は需要が伸び悩む煎茶の生産が中心であり、「儲かる商品（碾茶・優良品種）」への生産シフトが進んでいない。

3　静岡市茶業の現状（流通：国内①）

静岡県の荒茶生産量及び取引価格

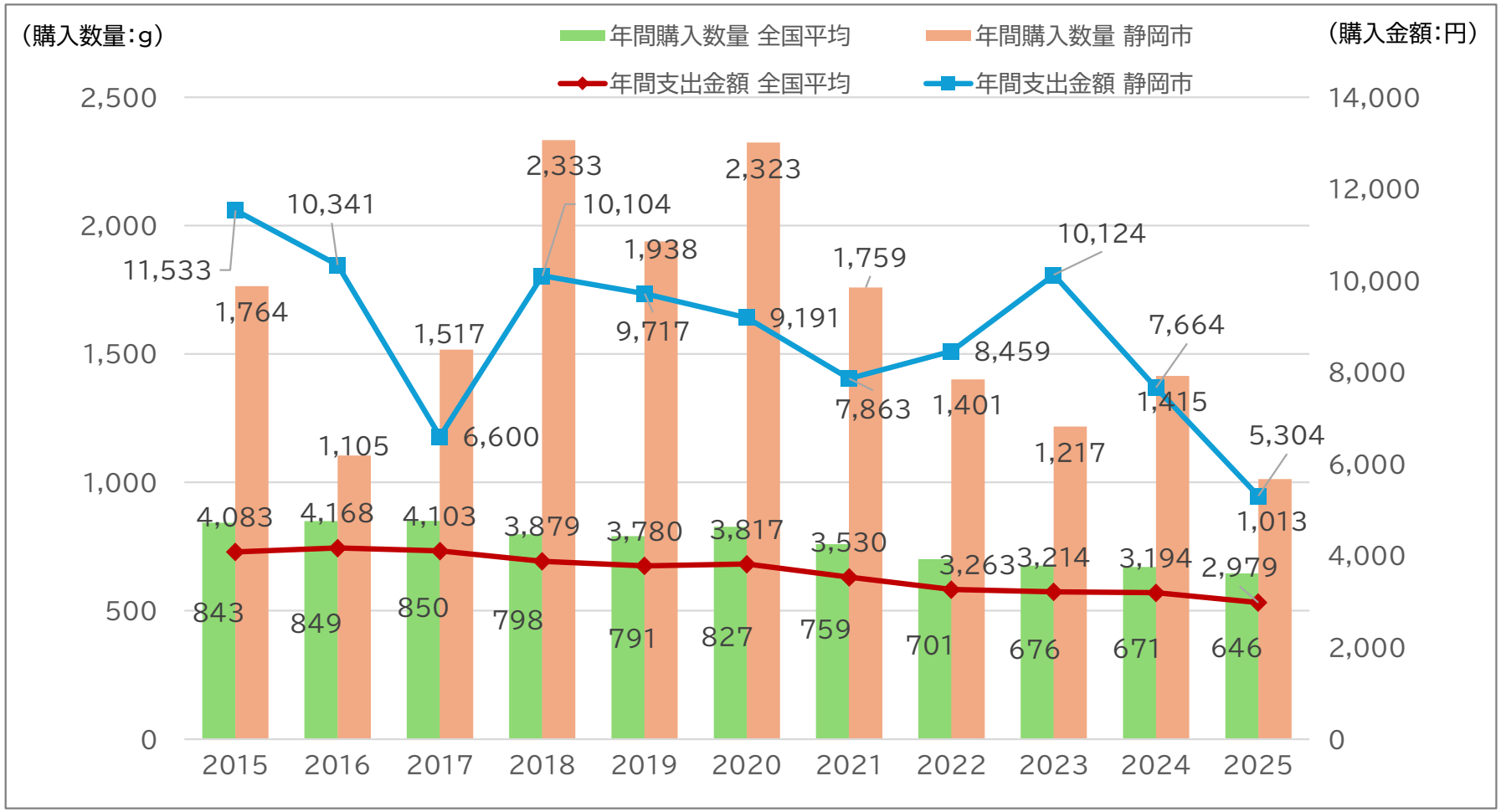


出典：荒茶生産量‥農林水産統計（農水省）、荒茶価格‥静岡経済連

●県内の荒茶生産量は、1990年→2025年でほぼ半減。
●荒茶取引価格は2000年→2024年で年間平均は約50%（一番茶は約40%）下落したが、2025年は、抹茶需要の増加に伴う碾茶価格の上昇及びリーフ茶の生産量減による需給バランスの改善により年間平均は2024年と比較し約80%（一番茶は約25%）上昇した。

3　静岡市茶業の現状（流通：国内②）

一世帯当たりの緑茶の購入数量及び金額

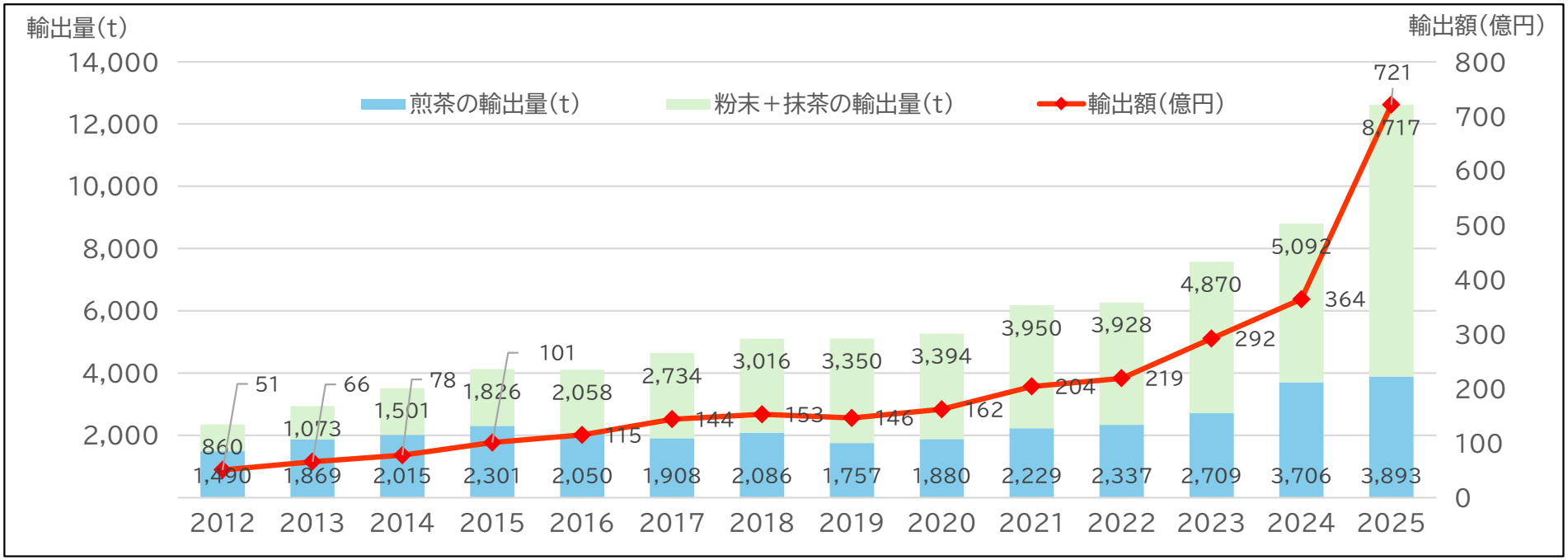


出展：家計調査（二人以上の世帯）

●購入数量・金額ともに、全国平均及び静岡市どちらも減少している。
●静岡市の減少率は全国を上回り、2025年の購入数量・支出金額はともに最高値の半分程度となっている。
（購入数量：2,323g⇒1,013g　支出金額：10,124円⇒5,304円）
●一方で、減少幅は大きいものの、静岡市の購入数量・支出金額は依然として全国平均の2倍近い水準にある。

3　静岡市茶業の現状（流通：輸出）

日本茶の輸出状況



お茶の輸出状況（全国）	2022	2024	2025
輸出量／全国の荒茶生産量	6,299t　／77,200t	8,798t ／75,200t	12,611t ／75,200t
うち粉末状（ ）は比率	3,183t（50.5%）	5,092t（57.9%）	8,717t（69.1%）
うち市内産輸出量（煎茶＋粉末状）	約7t	約50t	約92t
輸出額	219億円	364億円	721億円
うち粉末状（ ）は比率	147億円　（67.1%）	272億円　（74.7%）	604億円　（83.8%）

出展：財務省貿易統計、市内輸出量は茶農家／茶商への聞き取り調査結果

●日本茶の輸出量は、毎年順調に伸長しており、2025年は前年と比較して約40%増となっている。
●煎茶と粉末状の比率は、輸出量がおよそ3対7、輸出額がおよそ2対8となっており、粉末状が高価格で取引されているとともに、毎年粉末状の比率が高くなっている。
●輸出される静岡市内産の多くは煎茶であり、輸出量は増加しているものの、全国の輸出量に対する市内産輸出量は、全体の1%未満となっている。（約0.7%）

3　静岡市茶業に関する分析（SWOT分析）

内部環境

強み（S）

- 高品質な「山のお茶」の産地
- 茶市場・茶商の集散地機能
- 緑茶消費量・購入額全国上位
- 茶文化・歴史的資源
  （聖一国師、国産紅茶発祥の地）

弱み（W）

- 生産者の高齢化・後継者不足
- 生産者数・茶園面積の大幅減少
- 中山間地特有の生産効率化の制約
- 経営耕地面積の減少・分散化
- 耕作茶園の荒廃化
- 美しい景観の喪失

外部環境

機会（O）

- 世界的な抹茶需要の拡大
- リーフ茶の価値再評価・価格回復傾向
- 環境への配慮・サステナブル志向
- インバウンド需要

脅威（T）

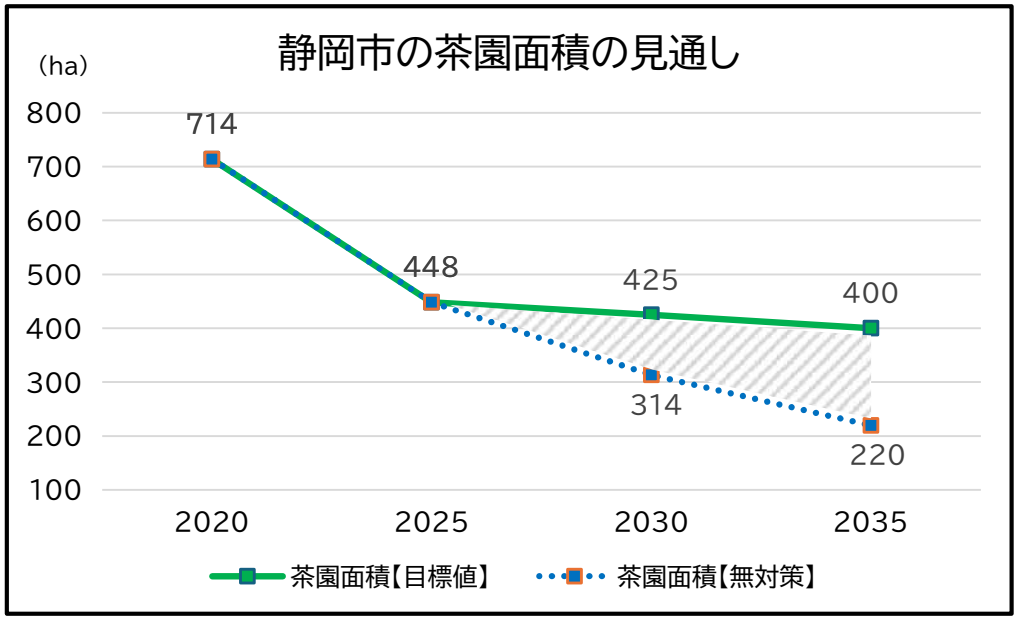
- 国内茶需要の低迷・縮小傾向
- 市場変化に対応した生産転換の遅れ
- 他産地の追い上げ、品質格差の縮小
- 異常気象による生育・品質への影響

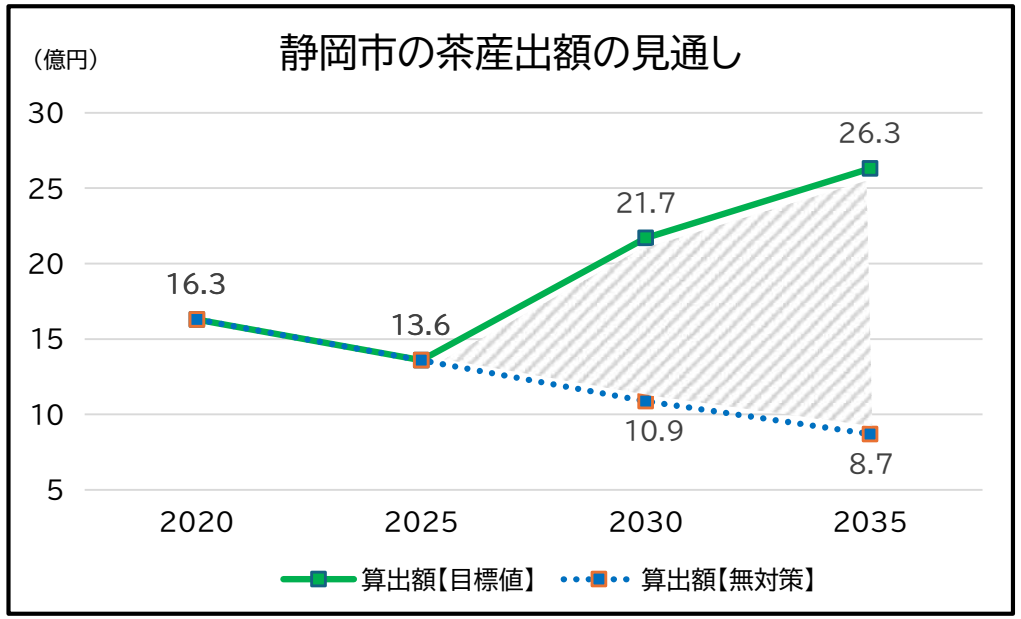
4　目標指標の設定について

＜目標指標＞※2025年⇒2035年
茶産出額　：　13.6億円　⇒　26.3億円
・10aあたり産出額（反収益）　：　30.4万円　⇒　65.8万円
・市内産茶輸出額　　：　5.26億円　⇒　11.15億円
・1世帯あたりの緑茶購入金額の全国における順位　：　4位（5,304円）　⇒　1位（9,609円）

（1）「茶産出額・10aあたり産出額（反収益）」の考え方

茶生産の過去の推移および国内外における茶需要の長期見通しを踏まえ、対策無しの場合の**趨勢**と対策を講じた場合の**目標値**を設定。



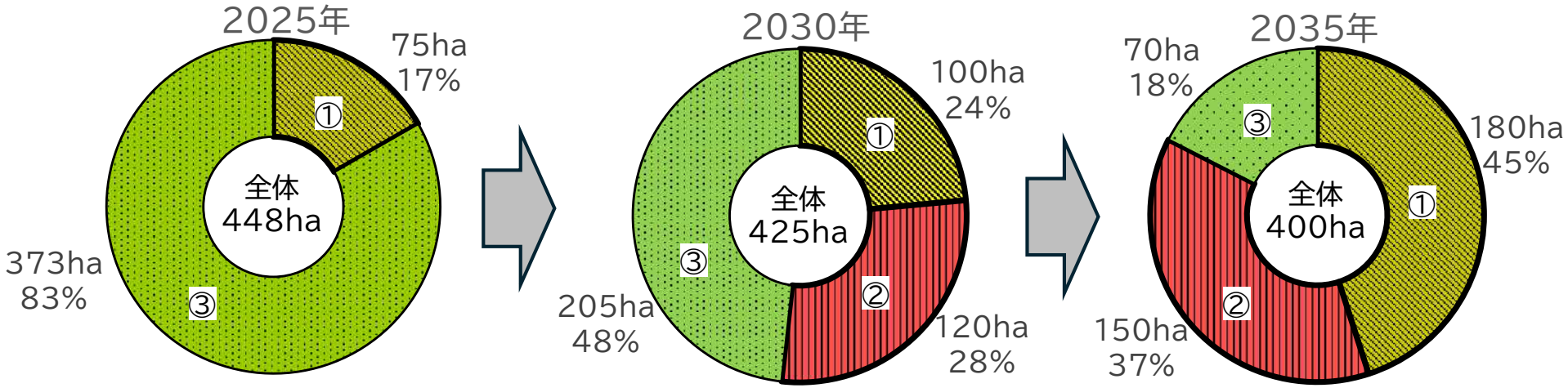


適切な対策を講じることで減少傾向に歯止めをかけ、持続的な水準の確保を目指す

4　目標指標の設定について

生葉出荷中心の生産から、**「高付加価値な茶」**や**「碾茶」**生産への転換を促進し、1経営体当たりの産出額の底上げを図る。

①高付加価値な茶の面積【煎茶】　**②碾茶の面積【碾茶】**　**③従来型の茶の面積【生葉出荷】**



		2025年	成長	2030年	成長	2035年
①	面積	75ha		100ha		180ha
	産出額	4.5億円		6.0億円		10.8億円
②	面積	0ha		120ha		150ha
	産出額	2.5億円		10.8億円		13.5億円
③	面積	373ha	転換	205ha	転換	70ha
	産出額	6.6億円		4.9億円		2.0億円
計	面積	**448ha**		**425ha**		**400ha**
	産出額	**13.6億円**		**21.7億円**		**26.3億円**

10a当たりの産出額 65.8万円

4　目標指標の設定について

(2)「市内産茶輸出額」の考え方

①県全体の「輸出量の目標」が、県全体の茶生産量のうちどれくらいの割合を占めるかを算出
（静岡県茶業振興計〈2026年3月〉より推計）
②市の茶産出量の目標値に、①の割合をあてはめ、市内産茶の輸出量の目標を算出。
③輸出額は、②の輸出量に1t当たりの単価を掛けて算出。単価は、県平均よりも高い、国の計画上の価格（540万円/t）を採用。

	2024	2025	2030	2035	2040
県輸出量(t)	2,830		4,383	5,676	6,970
県茶産出量(t)	27,200		25,600	25,300	25,400
市内産茶輸出量(t)	50	92	146	206	
市茶産出量(t)	977	900	850	920	
市内産茶輸出額(億円)	2.07	5.26	7.86	11.15	

※静岡市農業政策課推計

(3)「1世帯当たりの緑茶購入金額の全国における順位」の考え方

静岡市はこれまで長年にわたり全国1位を維持してきたが、2025年は4位となったことから、改めて全国1位を目指し、緑茶の消費拡大につなげていく。

なお、順位を補完する指標として「1世帯当たりの緑茶購入金額」を設定し、過去5年間の平均額7,883円を基準として、今後の物価上昇率を年2%と仮定し、2035年の予想値（9,609円）を算出。

（参考）

	全国平均	静岡市	順位
2021年	3,530円	7,863円	1位
2022年	3,263円	8,459円	1位
2023年	3,214円	10,124円	1位
2024年	3,194円	7,664円	1位
2025年	2,979円	5,304円	4位